令和５年度近畿ブロック保育研究集会　分科会記録

分科会（発題施設名）		登壇者が伝えたかったこと、分科会をとおして発信できるメッセージなどについてまとめてください。	研究討議（質疑応答）の内容	助言の内容
第１分科会	滋賀県 （認定こども園長岡学園）	仲間意識の向上や目標を持って取り組むこと、体力向上をねらいとし、登山を実施。 登山への準備期間にラジオ体操やマラソン、自分の頑張りを見える化できるチャレンジカード、山の壁面に自分たちの人形を一緒に飾る。 登山を終え、達成感や前向きに取り組む姿、クラスのまとまりや苦手なことにも取り組む姿などだけでなく、対話力や探求力、愛郷心を高められることができたとの発表でした。	Ｑ１.５歳児が実施したことにより３，４歳児への影響はあったか。 Ａ１.ともにラジオ体操やマラソンを行い、５歳児は憧れの存在となった。 Ｑ２．保育者が意識して声がけしたことはあったか。 Ａ２.保育者のかかわりで子どもは変わる。一緒に喜び、一緒に頑張り、前向きな言葉がけをした。	発題の内容を細分化し、助言した。 保育者の小さな行動であっても変われば保育の質は向上すると話された。
	大阪市 （保育所型認定こども園十三保育園）	保育者の物的環境の設定が子どもの主体性の育ちに、どのように関われているのかを室内環境の中で検証するため、自ら遊びを選べる６つのコーナー遊びを実施。 コーナーは、①発見コーナー、②お家遊びコーナー、③構造・構築遊びコーナー、④ゲーム・言葉遊び等コーナー、⑤制作コーナー、⑥一人ひとりにあった遊び・クラスから出てホッとできる空間づくりコーナー。 それぞれのコーナーを設置したことにより、遊びの展開や広がり、想像する力、提案力、自信、気持ちの成長が見られた。結果として、自己決定、友達との繋がり、達成感、自己肯定感、意欲、技能理解など主体性の育ちに繋がったとの発表でした。	Ｑ１.子どもはどのようにコーナー遊びを選択するのか。 Ａ１.プランニングボードを壁にかけ、自分が選択したコーナーに印を付け、各コーナーの利用状況を見える化し、自分で決める。 Ｑ２.制作コーナーで作った作品は展示するのか。 Ａ２.時期やスペースにより全ての作品が展示できない。家に持って帰ってもらうなど、作品を大切にしたい子どもの気持ちを大切にした。 Ｑ３.保育者の各コーナーへの対応はどのようにしたのか Ａ３.各コーナーを見守ったり、一緒に遊びまわったりする。また保育者同士が連携して渡り歩く。 Ｑ４.保育者が日々心掛けていることは何か。 Ａ４.サークルタイムで子どもたちの意見を取り入れる。また、子ども達に相談することもある。	発題の内容を細分化し、助言した。 子ども同士、子どもと保育者、保育者同士が試行錯誤の共有が大切だと話された。
第２分科会	大阪府 （汐の宮こども園）	・支援が必要な園児には安心して過ごせる場所が必要です。 ・問題行動は、保育者への SOS です。最初は行動が衝動的で、先手で動けませんでしたが、観察を深めることで少しずつ見えてきました。 ・保護者への対応は、オブラートに包んでいましたが、包み隠さず伝えるようにしていった事で保護者が本児に向き合うようになりました。保育士と保護者は、チームであると伝え続けるけることで、良い関係が築けました。 ・支援児の問題行動ばかりに注目するのではなく、得意なことを見つけ、マイナスではなく、プラスのかかわりが自己肯定感や集団作りにつながっていきました。	Ｑ１.絵カードを使用しているが、段々と慣れ、効果がなくなってきました。アップグレードしていますか？ Ａ１.その子の発達に合わせて用意しているが、実物か写真を用意することもあります。 目で見て理解することが得意な子には「視覚支援」が有効ですが、基本は、その子が絵を見て行動するしかないかは、保護者のコミュニケーションによって成り立っています。 ・視覚支援は、その子の育ちに応じて変化させていくことが大事で、理解しても即行動に移せるような単純なものではなく、基本的にコミュニケーションの意識づけの上で成り立つものです	・多様性の尊重とは、集団の中の寛容の精神や優しさがある中で、異なる考え方や一つの社会の構成員として認めることです。 ・「みんな違ってみんないい」とは、多様性を象徴する言葉だが、一方で分断を促しかねない言葉でもあります。保育士が苦悩に思っているということは、とても良い経験であり、投げ出していない証拠です。 ・bright spot approach とは、一人ひとりの個性がいかされ、その子が輝いている所をアプローチすることです。問題点ばかりに目を向けず、みんなで共有して、保育を進めていくことが大切です。
	京都市 （みつばち保育園）	・医療的ケア児が様々な体験をするには、消毒や衛生面などのリスクはありますが、他児と一緒に過ごすことにより、他児の優しさ、同じようにしたい、やってみたいという思い、確実に成長していくことで、ともに育ち合う環境が整うと思います。 ・家庭では、家族が当たり前でやっている行為を、園では看護師でないとケアしてもらえないことに保護者は疑問を持っています。保育と看護の両輪の専門性が、本児の発達を大きく支えていくので、連携の強化と保育での看護師配置は必須事項だと思います。	Ｑ１.医療的ケア児の受け入れの際、市や関係機関から看護師や訪問看護師などの紹介や援助的なことはどうされていますか？医療的ケア児支援法について教えてほしい。 Ａ１.園が独自に訪問看護ステーションと契約をし、何かあればすぐに来てもらうようにしています。行政には現在働きかけている途中です。 助言者　松井剛太先生より 医療的ケア児支援法の立法の目的は、医療的ケア児の健やかな成長を図るとともに、その家族の離職の防止の助けとなります。また、安心して子どもを産み育てることができる社会の実現に寄与します。	・保育所において行うことができる医療ケアとは、特定行為（認定特定行為業務従事者として認定された保育士等、または看護師が実施）として、口腔内の喀痰吸引、鼻腔内の喀痰吸引、気管カニューレ内の喀痰吸引、胃ろうまたは腸ろうによる経管栄養、経鼻けい管栄養があります。 ・受け入れるということは、その子のことを理解して、園の中で良い場所を作り、その子が輝けるようにすることが大切で、本来は、全ての子どもに必要であります。支援を受けずに、自ら輝いていることこそが必要であると思います。遊びの中で生かされたという部分が保育的には重要であり、その子の輝いている部分にスポットをあてて保育を考えていくことが大切です。

第３分科会	奈良県 （天理こだま認定こども園、右京こだま保育園）	コロナ禍においても保育者の資質向上を図るために職員一人ひとりが学びを深め、「こどもをまん中」においた保育の大切さを理解し、子どもの「やってみたい」を実現できる保育環境を目指して、自然が豊富な園庭環境を改善するために、園単位をチームとして現場の保育者自身も主体的に取り組み、園庭に特別な工夫された遊びのコーナーを様々な場所に設置するイベント日の実施 （園庭パワーアップデー） 取組みを改善し、末永く継続するためには、今のこどもの姿を見つめ、子どもの声に耳を傾け子どもが感じていることを皆で語りあい、こども理解を深め、遊びをつなげていけるよう、環境を整え、保育者自身その必要性を感じ、楽しんで取り組んでいくことが、魅力的な保育現場に向けて大切なことであるとの発表でした。	Ｑ１.園庭パワーアップデーの職員の負担はどれぐらいあったのか。職員の仕事を軽減されながら、どのようにすすめられていかれたのか。 Ａ１.最初は、例えば夏であれば４歳が泥んこ遊びをし、次の日５歳が色水をしてというクラス単位で遊んでいるという取り組みでも、いろんなコーナーを作って、自由に子どもたちがやりたいことをやりたいときにできればいいよねということから、普段のクラスの計画を園全体で行うということで、特にそこの分担の話し合いで特別に増えたということでない。負担軽減ということでは、話し合いの時間を持つことがなによりかなということで、普段の業務にＩＣＴ化を取り入れながら、うまく時間を捻出して話し合いの時間をとって上手くまわるような努力はしてきた。 〈２つの質問の１つ抜粋〉	保育の魅力発信の評価は、お互いに対しての尊敬尊重に基づき、子どもに対しても職員間でも、話し合って対話できる互恵的な、それぞれが発揮できるような職場風土の醸成というものがあるなということ。子ども主体の保育を再考されたり、行事を見直したり、環境を構成したり、再構成したりすることは、とても大切。職員間の中で実践を振り返ってしっかり話し合って、それぞれが主体性を発揮しながら資質向上する。自分たちの言葉で話し合っていくことが保護者や地域に説明する力が増えてくる。園庭マップの中に子ども理解の進化、好事例を確認したこと、課題や今後の主題、予測みたいなものも入っていて、まさしくこれらが保育の魅力の発信。
	兵庫県 （認定こども園いくさと、認定こども園ふたば）	保育者の資質向上を図るために「目の前の子どもの姿に学ぶ」ことを大切に保育・教育の充実に繋げる園小の合同研修を活性化させ実施。二つ目として「親たちの声に学ぶ」ために保護者アンケートの内容を改善しながら、実施時期、回数を変更して実施。 これらを継続して取り組むことで小学校教員、園職員が互いの教育の理解が図られ、保護者の方へのアンケート結果を園として、優先順位をつけ改善することは、保育者の資質向上に繋がっている。また、それは、地域の方々に助けてもらって保育・教育を日々行えているからであると考えている。 結果として、保育現場の魅力を小学校関係者の方から、保護者の方から、地域の方から発信して戴いているとの発表でした。 大きな成果として、小学校との連携の中での小学校のスタートアップカリュキュラムができている。	Ｑ１-①小学校と連携するための壁を感じていますが、うまく連携できるきっかけのようなものがあれば教えてもらいたい。 Ｑ１-②PDCA の職員の自己評価から職員のモチベーション、仕事に取り組む姿がどのように変わったのかを教えてもらいたい。 Ａ１-①小学校と同じ敷地内にあるだけでなく、教育委員会から連携園の指定を受けたことがきっかけに、継続するために合同の研修会を実施。そして、小学校のスタートカリュキュラムを作るにあたって、こども園の先生と小学校の先生が、5 歳児の最後の姿と小学１年生の４月、５月の姿を接続するための合同研修会を実施した。 Ａ１-②職員の自己評価のモチベーションは、保護者の方の評価がよくなることによって高くなるし、子どもへの声掛けひとつも変わってくる。 〈２つの質問の１つ抜粋〉	実際の教育保育の中身のところをしっかりつくっていけば、人が変わっても、施設の名前が変わっても、主体が変わっても継続して地域の財産になっていくのではないかと思います。保護者の要望、社会の要望がすばらしいものだったら変えてもよいが、しかし、指針や要領に相反して子どもの人権にかかわるもので受け入れできないものは、保育専門職として、私たちは、保護者の要望や社会の要求をすべて聞くのではなくて、必要人権的観点から、こどもの権利保障最善の利益の観点から必要だと思ったものに関して、社会に発信して説明して広げていく。みなさんは国家資格をもった保育専門職です。やはり子どもの代弁者であり、人権保障の大事な存在なので譲れないところは譲れないでよい。
第４分科会	滋賀県 （茶臼山こども園）	・子育て支援事業「かなかなクラブ」を実施。２、３歳児対象に少人数制（５人程度）で教具・玩具を使って友達と遊んでいる様子を保護者に参観してもらう。 活動を通じ子どもの捉え方や関わり方を学ぶ、その後保育者を交え子育てで困っていることなどみんなで考える時間も持つ支援事業を実施。 支援を受けた保護者の感想から、子どもが何かに取り組んでいる姿を客観的に見ると、家庭で出来てないと思っていたことが出来ていたり、子どもが自分でする力を持っていることに気付かされたり子育てへの自信につながったという感想を紹介し、保育者も悩みを聞き「ああかな」「こうかな」と一緒に考えることが、子育ての安心感につながり保護者支援をしていることに気付けたという発表だった。	Ｑ１.保護者支援は 0, １歳児を対象にしている園が多いが、2,3 歳児対象の理由を知りたい Ａ１. こども同士、保育者とのかかわる様子を参観し成長の喜びや安心感を抱けるよう子育て支援を行っている。 Ｑ２.保護者同士の交流支援はされているのか？ Ａ２.活動後保護者の悩みを聞く時間を設けている。 発題者園の園長：0,1 歳児だけが困っているわけではない、こどもを支援することが子育て支援だと思っている。自園で出来る保護者支援を行っている。 意見１：親同士の交流だけが保護者支援ではない、子どもを支援することも支援だと思う 意見２：それぞれの園の出来ることで保護者支援が出来るのだと改めて知った。子どもが親から離れほっとし、客観的に見ることで子どもの成長が見えてくる実践で良かった。	助言者：スタッフ、活動の意図を具体的に尋ねたい。 発題者：スタッフはシフトで動いている。活動は他の職員も覗けるようにしているが普段通りの活動で身に付いている。玩具はカードで整理し、その子に合った玩具を提供できるよう環境を整えている。 助言者：虐待の予防観点から保護者の心配を取り除く、見守るに位置することを示された。玩具をカードで整理するなど専門性が高い。 親は一生懸命お世話しているが、こどもは自分でやれるようになりたいと思っている。 そのことに気付けるよう保護者へ一貫性のある活動を通じ、マネジメントしていくことの大切さを保護者へ支援している実践だった。色々な保護者支援があっていいと思う。

	神戸市　神戸市私立保育園連盟テーマ委員会 （親和保育園・幼保連携型認定こども園神出保育園）	神戸市は多文化共生の町づくりの実現に向けて外国人支援策を実施している。外国人数とともに外国につながるこどもの数も増加する中、保育の現場では「困り感」を抱えながら保育に試行錯誤している実態がある。 外国につながるこどもの実態や困り感、保育者の意識等のアンケートを実施。言葉によるコミュニケーションの難しさや宗教、食習慣の違い等が見えてきた。事例を用いて課題も探った。 保護者、区の子育て支援担当者への聞き取り調査から生活実態が見えにくい日本語表記の内容把握や記入の仕方に苦労している実態があった。言葉の壁により「だいじょうぶ」で片付けている姿も多くあった。 保育現場で困ったことだけを捉えるのではなく、母国語、母国の文化など多様性の尊重を実践する姿勢が大切ではないかという気づきがあり、多文化共生の教育及び保育を進めるには保育園から地域や関係機関に発信していける役割があるのではないかとの発表だった。	Ｑ１. 神戸市ならではの保護者支援と思うがどの地域にも通じることなのか。 Ａ１. 地域によって外国人数が違うので少し違うと思う。 Ｑ２. 長期、短期滞在者の方がいると思うが何を大切にされているのか教えて欲しい。 Ａ２. その国、家庭を理解することが大切だと思っている。アイデンティティーを大切にしている。ひとり一人を大切にするという事だと思う。常に日本の保育は、自園の保育は正しいのか日々問いながら過ごしている。地域性で神戸市は外国につながるこどもが多いが、今後の社会は文化の多様性となっていくと思う。	山縣先生の文献から育む環境支援を示され地域社会を子どもの機能的空間に位置することを示された。関係機関とのパイプ役、保育園所同士、皆で作っていくものだと思う。 保護者の「だいじょうぶ」は大丈夫なのか？「だいじょうぶ」の中に隠れている困り感、不安など受け取る側の意識の共有が必要だと思う。大丈夫じゃないところを話してもらえるよう個別支援だけではなく、潜在力にも気付きながら、社会の問題として理解することが大切である。園の役割として一時保育や活動を通して相互に関係性を築き、人と人がつながり助け合う関係性等の工夫が必要だ。例としてビギナーズ交流会など示された。多様な側面を支えるコミュニティーとして園を考えていきたい。神戸市の研究は小さなところから社会を動かせる、そういう発表であったと思う。
第５分科会	京都府 （みんなのき Hana 保育園・みんなのき三室戸こども園）	こちらの施設では、利用者の子育ての課題に寄り添い、地域子育てネットワークと協働し「いま」必要な支援をつなぐ役割を担っておられます。サポートの方法や工夫としては、子ども、保護者を尊重・肯定する場作り。子ども、大人関係なくひとりひとりを「一人の人間」、「あなた」として尊重して向き合うことを大切にされています。みんな違うからこそ面白く、楽しく幸せでいることができる。利用者の方の悩みや相談を様々な方面から支援サポートすることで、子ども、大人一人一人の「いま・ここ」と向き合われています。利用者の居心地の良さを追求していくために、いつでも相談できる安心な場所になるよう、職員の皆さんがゆとりをもって子育て支援をされている発表でした。	Ｑ１．子育て支援ネットワークの表から、法人がもたれている施設と行政の連携は密にされていますか。 Ａ１．ファミサポとの連携や、市とは１日２～３回連絡をしています。宇治市の建物で２階が保育園で３階が支援サポートを行っています。宇治市と情報共有できており、気軽に相談できる関係が築けています。 Ｑ２．環境構成で、子どもの主体性を大切にされていますが、例えばハサミを使用する時は、どのように工夫されどこまでされていますか。 Ａ２．子どもがしたいことを確認して、それが実現できるように母親も一緒にしてもらい、積極的に大人も子どもも楽しんでいただいています。応答性を大切にして子どもが遊びだすことを大人が支える。親が他の子どもも一緒に見守ることで、親同士のコミュニケーションにも繋がっています。 （意見感想）地域子育てで、講座などもしているが全てこちらからの押し付けになっていた。保護者も主体的に動けるように拠点事業の方向性を変え見直しをしています。 Ａ．保護者の会話から保護者の思いを汲み取るようにしている。インスタ等発信して様子を見ています。	拠点事業の見直しの時期がきています。情報発信はどういう意味をもっているのか、検証は難しい。 ツールを使うことはいいと思います。園の取り組みがどれだけ見える化されているか、何をねらいにどのような成果があるのか、カンファレンスする意味があります。 自分で思ってしていることと、第三者とは感じ方が違う。今後は色々なことが変わっていくためのシステムづくりが大切です。 支援については、イベントのようになりがちなので、プログラムをつくることが大切です。発信方法については、連携を取る機関との関わりが重要で支援活動をする人の大切な戦力は、笑顔とプラスの声掛けです。
	和歌山県 （和歌山市立砂山保育所）	小学校との交流を通して、乳幼児期から児童期への円滑な接続を大切にされています。連携会議や研究成果を小学校の先生方と共有する機会をもち、園での子どもの育ち、卒園児の小学校での育ちの課題や楽しんで学習に取り組める授業の進め方等、相互理解を深められています。 また、園内研修では職員間で子どもの育ちや学びを共有し環境や保育の工夫・改善を行われています。０歳からの発達、学びの連続性を大切にした保育の積み重ねが小学校以降の豊かな学びに繋がることや、交流、園内研修を通して、地域の中で子どもも大人も関係が深まる取り組みを行っておられる内容の発表でした。	Ｑ１．小学校との交流はハードルが高く難しいと思う園が多いと思いますが、距離以外で交流ができる園・できない園の理由は何かありますか。また進め方のヒントを教えてていただけますか。 Ａ１．小学校との連携は、長との関係性や小学校の先生の考え方もありますが、積極的に園から働きかけています。まずは連携会議を依頼するところから始めています。また子ども達が「小学生と一緒に鬼ごっこがしたい。」と言っていること等子ども達の声を伝えるようにしています。	園と小学校との連携については、行政、地域との繋がりや学校教育にいかに繋げるかが大切です。架け橋プログラム。１０の姿を基にすると欠落するものがあるため、保・幼・こども園については、保育内容を５領域に基づいて行うことで１０の姿になる。保育はやらせになる可能性がある。経験が次の自分をつくるため、きっかけづくりが大切です。 園と小学校の連携では、長の関係性や１・２年生の先生の考え方も大切です。関係性をつくること、それぞれがアイデンティティを保持していること。園で行っていることを表明して、保育者が小学校で授業を担当したり、小学校の先生に保育をしていただく等平等な関係性をもつことが大切です。

第６分科会	奈良県 （たかとり保育園・明日香保育園）	食育の目的を「食べる力は生きる力を育む」とし、一年を通して地域の豊かな自然や食材に触れながら、四季折々の体験を取り入れた食育を実践。 食育体験や様々な活動の中で、友だち、保育士、地域の方々、みんなと一緒に経験することで沢山の体験を通し、毎日の食事がたくさんの人の手に経て出来ていることや自分達が命を頂いて大きくなっていること食材からもらった命を大切にすることを知り子ども達の生きる力を育むことが出来た。こうした体験から育まれた生きる力の基礎が、大人になった時に命の大切さにつながっていくのではないかという発表でした。	Ｑ１.食育計画と保育計画の関連性はどうか Ａ１.年間の保育計画に入れ込みながら子ども達の負担にならないようにしている。 Ｑ２.年間の食育計画や食育行事は、どう決めているのか Ａ２.現在の計画に至るまで、色々な取り組みを試みたり時代のニーズに合わせて試行錯誤したりし現在の形となった。 Ｑ３.栄養士・管理栄養士・調理師との関わりはどうか Ａ３.行事等、事前の段階で相談しながら関わっている。	○保育計画と食育計画は別ものではなく食育は保育の一部である。保育計画の中に食育が位置づけられ食育計画の中で、細かい内容があると食育というものが保育の中にはっきり位置づけられる。 ○職員全体が一丸となり関わること・地域との関わりなど他職種の共同はとても大切である。 ○イベント(限定)的な取り組みが協調される傾向にある。クッキング・栽培活動をすることは、手段の一つであり最終目ではない食育に取り組む目的を明確にすることが大切である。 ○食育活動の目的とは、食への興味や関心を引き出し食を楽しむ子どもを目指すことである。
	京都府　北区保育士会研究発表プロジェクトチーム （大徳寺保育園・社会福祉法人上賀茂福祉会　上賀茂こども園）	保護者アンケートを通して家庭の状況・保護者のニーズ捉え、新たな食育の連携や支援の方法を考察し北区全体で実施。 保護者の声が明確になり家庭の様子や支援のポイントも明確になった。集まったデータや各園の情報を区として共有し発信することで、保護者にも気楽に受け止め、さらに取り組みを通して無理せず普段の生活の中で親も子も楽しんで行える「食育」を伝え区全体の食育活動の底上げが図られるよう進めていきたいという発表でした。	Ｑ１.アンケート回収率は６０％以上ないと回答者の傾向が偏ってしまう事もある。回収率の低い原因は何か Ａ１.集約のしやすさや保護者のスマホの利用率を考慮して Google のアンケートホームを使用しアンケート依頼分・ＱＲコードを配布したが、保護者にとってとっつきやすいが、アンケートの全体像が目に見えないことや実施期間が夏休み中ということもあり普段と違う生活スタイルとなり回答率が低かった。また、コロナの影響もあった。	○「食」は毎日、繰り返される日常生活の一部である。保護者にとって他にやることが沢 山あるので「食」の優先度が低い中で保護者の気づきを促し行動変容に導くには、保護 者の関心事、希望を優先し、専門職が保護者に望む目標を高くせず行動変容により得ら れる利点を具体的に示すとよい。 ○アンケートの読み取りをしていく中で、保護者の声が数値化されたことで、家庭の様子 　や支援のポイントも明確になり本研究の目的を保護者に伝えることができアンケート 結果を通して保護者に還元できている。
第７分科会	（大阪府　認定こども園ちとせ學院　　あけぼのひだまり保育園）	保護者は、園での様子を実際に見て、安心して預けられるのか知りたいと思っています。情報発信の方法として「保育参加」をして、保育者と子どもの関わりをみてもらいました。 ＊複数の保護者が参加する保育参観とは違い、個別に参加するのが、保育参加。 　保育参加を行った結果、園の職員と保護者が子どもに対して共通認識を持つことができました。保育参加の効果は大きく、保育士の仕事に対して理解が進み、園の方針への理解も深まったといえます。保育士の負担感も前もって手立てすることでそんなに大きな負担もありませんでした。 　公共性の高い保育園やこども園での活動を知らせるために、保育参加は有効な機会となります。 保護者にとって、初めての育児では、食事の介助一つ取り上げてもどのようにすればよいか教えてもらえるところがないので、保育者の介助を見て、参考になることもあります。これは、地域の出産前の人にも対象を広げることで、子育てをする上での見通しが見られるのではないかと思われます。 保育参加の効果 　保育施設への透明性　保護者の安心につながる　保育士の仕事のモチベーションにつながる 　保育参加は、保護者の育児支援として、有効な手立てとなります。 今後は、園に通っている保護者だけでなく、地域の出産前の方へも対象を広げることで子育ての見通しがみられるのではないでしょうか。	Ｑ１.給食の時間を設定した意図はありますか。 Ａ１.喫食の状況を見てほしいという考えがあったからです。 Ｑ２.保育参加をしていて、不都合なこと、困惑することがあれば事例を教えてほしいです。 Ａ２.保護者が仕事の都合をつけることが大変かもしれませんが、９割以上が参加されています。 　普段から保護者に参加してもらえるように関わっています。 　保育参加終了後のアンケートには、思いがあふれて、裏まで書いている方がいます。 園の方針と違うところを記入されていたら、園が大切にしているところはその都度伝えていっています。 今回の取り組みでは、８家庭だけの取り組みでしたが、今までは保育士の仕事を知ってもらえる機会がなかったので、職員からも好評でした。 Ｑ３.自分の園ではやっていませんが、何人の保護者を一度に受け入れられるのですか。また、WEB で見せるのとの違いはありますか。 Ａ３.１日に１クラス１名にしています。９月～２月で仕事の都合がつくタイミングで来てもらっています。 　WEB との違いは、その場で聞く育児相談となっていることです。 　保育参加後は、個別の面談を１０分ほどとることができています。	保育の営みをどう発信するかというところを保育参加という手段で発信したという実践でした。今後、在宅の家庭への支援をどうしていくのかも課題となると思います。 いくら育児書を見ていても、子どもを育てるとはどういうことなのか理解は難しいです。 園児の保護者が、実際に保育の様子を見たいという要望に応え、保育参加してもらい、結果、子どもや園のこと、保育者の仕事を理解してもらえたことに意義がありました。 医療は、薬を誰にでもわかる形で提供しますが、私たち保育者は、環境を整えて保育しています。保護者や社会に向けて、何もしなければ、私たちの仕事はわかってもらっていないと認識しておかなければなりません。 今の子育て世代は、子どもを育てるという営みを見ていません。だから、生まれる前に見ておけば、育てる時に見通しが立ちます。今後も保育の専門家として発信できることを考えていきましょう。

			Ｑ４.保育を保護者に伝えきれておらず、園でも職員間で話し合っていますが、どのように保育参加に取り組むとよいのでしょうか。清掃員の恰好をしながら、どのくらい子どもの姿が見えるのですか。 Ａ４.清掃はほどほどでいいと伝えていますが、結構一生懸命清掃してくれています。 　子どもとの関わりは極力してもらっていません。普段から、清掃業務を外部に委託していて、保育者以外の人が保育室にいることが日常的にあるので子どもたちには違和感がないようです。	
	神戸市 （神戸市立田中保育所、神戸市立鈴蘭台南町保育所）	神戸市には、56 か所の保育所があり、その中の７名（若手～ベテランまで）で委員会を構成しています。研究テーマを「地域で子育てを支えていく」「保育の営みの重要性を伝えていく」としました。 自分たちが何をすべきか考えやすいようにキャッチフレーズを「チャレンジ　ワクワクドキドキ子どもの未来へ大作戦」と決めました。 保育の社会化に向けて「可視化」「共有化」が必要となってきます。保育士同士でドキュメンテーションを見ながら、子どもの主体性について話し合いました。他の人の意見も聞き、子どもの見方や視野が広がり、自信にもつながりました。遊びを通して学びがあること、生きる力を育むことなど、それぞれが自分の保育を振り返るきっかけとなりました。 次に、保護者へも何を伝えたいのか、語り合い、保育の内容を明確に発信するようになりました。保護者が保育に関心を寄せ、保育者は、伝わりやすい言葉で応答していくことで相互理解できます。視点を定めて発信することで保護者に興味関心を持ってもらえるようになっています。保護者に伝わった喜びを保育者が感じると、さらに継続して発信するようにもなっています。 【保育者同士の語り合いの重要性】 ◎キャッチフレーズを通して発信することで、ポイントが定まる ◎対話を継続して、だれもが安心して考えを語り合える雰囲気を大切にする ◎職員間の関係が深まる 今後に向けても、質の向上を図り、発信力を高め、地域の保育所としての役割を担っていきたいです。	Ｑ１.園内でも保育を共有したいと思っていますが、みんなで話し合う時間をどのように捻出していますか。 Ａ１.ドキュメンテーションで発信しているので、ポイントをしぼって、話し合っています。また、付箋を使ってみんなの意見を出せるようにして、保育者だけでなく、調理員もパートの職員もみんなが意見を出せることが大事と思っています。全職員が集まれる機会はないですが、一番大切にしていることを付箋で貼っておいてもらいます。一人残らず聞くことが大事だと思っています。 Ｑ２.ドキュメンテーションは、誰が作っていますか。また、保護者からは、どんな声が聞かれますか。 Ａ２.担任が作っています。タブレットで撮った写真を使ってその日のうちに出しています。 発行頻度は、伝えたいことがある時に、発信しています。行事の前は、全体が見えている職員が作っています。負担感なく、作れることが大事です。タブレットがあれば、各クラスからでもタイムリーに作れます。１０の姿が…とか思いすぎると、書けなくなりますので、まずは、出すところからだと思っています。そして、お互いのドキュメンテーションを見せ合うことでスキルアップしています。 保護者からの反応も、写真があるということで興味を持ってもらえています。ファイルに綴じて置いておくと、以前貼りだしたものや他のクラスのものも見てもらえます。 Ｑ３.公立なので、共有が難しかったのだと思いますが、社会化に向けてということをさらにもっと聞きたいです。 Ａ３.共有したことを保護者へ伝えるために足元をまずは固めようと思い、取り組んできました。 他の関係機関とも、もっとつながっていって、保育の発信を続けることが社会化だと思います。今後の課題とさせていただきます。	保育者は、何の専門家なのでしょうか。子どもの最善の利益とは、何のことなのかをドキュメンテーションを通して保護者に伝えています。一つの遊びをどう見るのかということを、保育の専門として、遊びの中で何が育っているのかを見取って言語化することが大切です。 忙しい中でどう時間を作っていくのか。職員間の話し合いも一つ間違えると雑談になってしまいます。内容を焦点化して話し合うことで対話になります。 　保護者は、ドキュメンテーションは、文字だけよりも見て理解しやすいと思います。どう子どもの育ちを理解してもらうのか、何のためにそこに道具やおもちゃが置かれているのか、どんな関わりをしているのか、連絡帳に書いても理解してもらえないかもしれません。 　ベテランの職員は、当たり前に環境を用意して保育していますが、若手の職員に向けても、見える化にして伝えていかないとわかっていないと思います。 　これからは、創造する力、イメージする力が必要となってきます。
第 8 分科会	和歌山県 （和歌山県田辺市立はやざと保育園）	【①子どもが遊びこむための、生活や遊びの場の在り方を考える】 生活と遊びのスペースを分け、作りかけのものを残しておくことによって、遊びの連続性が確保できるようになり、子ども同士の協同作業や試行錯誤など『遊びが遊びこみへと発展』することにつながった。さらに、これらの様子について記録を取り【幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿】と照合することで、遊びの中の育ちや学びを可視化することができた。 今回の活動で対話や協同で遊ぶ環境の重要性を確認することが出来	Ｑ１．小学校との連携について詳細を教えてほしい。 Ａ１．連携を円滑に進めるため小学校からスタートカリキュラムを提示してもらい、保育所のカリキュラムに当てはめてみた。 Ｑ２.連携に際して小学校の授業内容を意識して進めているのか。 Ａ１．小学校の授業（教科）を意識した内容ではなく、遊び	多忙な小学校側との連携は簡単ではなく、対面での連携が取れない場合は記録物（書面）で連絡を取りあうことも検討する必要がある。進行としてはＰＤＣＡサイクルに沿って進めることが理想だが、子どもの姿をよく見た上でＤから始めてもよいと考える。 小学校との連携は重要だが、学校の授業を意識した取り組みは不要である。過度に意識せず『遊びの意

		た。『遊びこめる環境』の整備が子どもの興味や関心を広げること良い結果につながった。 【②保育所と小学校が子どもの育ちや学びを共通理解し、円滑な接続を図るための連携の在り方について考える】 子ども同士の交流として『手紙の交換』『自己紹介ポスター送付』に中心に計画内容を切り替えた。小学生は入学前の子どもを知ってもらう機会ができ、保育園児は小学校に興味と関心を持ち、相互に良い影響が生じる結果となった。一方で職員同士の交流は【幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿】を保育園側から小学校側へ提示することで、育ちと学びの共通理解を得ることが出来た。 今回の活動より地域の小学校との連携を再確認することが出来た。コロナ渦で制約を受ける環境下ではあったが、違う方法で交流することで保育士の意識にも変化が見られた。まだスタートしたばかりだが残された課題にも取り組み、子どもたちが安心して小学校で学べる日が来ることを希望する。	を主とした内容である。	義』を保育の専門家として発信していくこと大切である。 『遊びこむ中で育ちと学びをつなぐ』のテーマに惹かれた。プロセスを観察，記録し【10 の姿】に当てはめた後に、小学校の先生と共有しようとしている活動について素晴らしいと思った。この活動で大事にしたいことは結果のみに着目せず、子どもの変化（プロセス）を中心とした保護者や地域など周りの様々な変化にも注目することである。 懸念事項としては、校長先生次第でお互いの接続関係が変わってしまう恐れについてである。良い関係を持続させるため小学校側に担当者を決めてもらうことが大切である。また保育園側が用意した記録を小学校で有効活用してもらうべく、小学校側が知りたい情報を聞き出すことも事も重要である。
	大阪市 （大阪市立矢田教育の森保育所）	⑴病後児保育事業について 病気回復期において仕事や急用で家庭での保育が困難な場合、一時的に子どもを預かることで子育てと就労の両立を支援する事業であり、他の保育施設に通う家庭も対象にしている。 利用状況については 0 歳～2 歳が 7 割以上を占めている。帰宅後のケア方法アドバイスや、保護者に寄り添う対応を心掛けた結果リピーターも増加中である。また近年では『子供の健康に関する情報通信』を作成しており、周知活動用のリーフレットと併せて関連施設に配架中である。 ⑵地域子育て支援拠点事業（つどいの広場） 『つどいの広場』とは在宅で子育てをしている家庭への支援であり、育児の孤立化防止や保護者同士のつながりの一助としての役割を果たしている。なおアンケート結果では『遊べる場』『相談できる場』以外にも『人と話せる場』としてのニーズが高く、一部の課題は残されていながらも当該事業が高く評価されている事が確認できた。 その一方で入所家庭への支援ついては問題を抱えており、保育会議の結果では保育士の”相互連携の希薄性”または”担当クラス以外に無関心（クラス主義）”など縦割りの弊害が浮き彫りになった。 当該問題を解決すべく『みんなであそぼう（全児で遊ぶ日）』を設定した。その結果、担当クラス以外の児童との接点が出来る様になり、次第に交流が活発になった。 さらに『おはなしタイム（担任以外の保育士が読み聞かせをする）』『おかわり保育（担任が入れ替わって保育をする）』の実施より、子どもの様子をじっくり観察する様になった。 また月に 1 回実施している『アセスメント会議』では、以前より活発な意見交換が行われ、職員間の共有が深まる結果となった。 これらの取組みがクラス主義になりがちな保育士の意識改善をもたらし、職員全体のスキルアップにつながった。また今まで以上に子どもの成長を見通した保育が展開され、保育園への信頼が一層増した様に思われる。	Ｑ１．病後児保育事業について詳しく教えてほしい。 Ａ１．担当スタッフは看護師 1 名と保育士 1 名で活動している。ちなみに病後児童がいない場合は保育所本体の業務に従事している。 また情報発信については発信内容を担当スタッフ間で事前に協議している。完成 した資料（リーフレット）は前述の通り、関連施設に配架し周知に努めている。 Ｑ２．みんなであそぼうの運営方法について詳しく教えてほしい。この取り組みが保育 士の負担にならないか心配である。 Ａ２．当該活動は年 4 回実施。現在のところ皆が肯定的にとらえており、負担とは感じ ていない様子。また取り組んだ内容を自身担当のクラスにフィードバックして おり、現在のところ上手く運営が進んでいる。	『地域の子育て支援』は喫緊の課題であり、相談機能を有した保育所の職員（保育士）は高度な専門職である。そんな保育職のキャリア形成（求められる職能と伴う職責）とそれに応じた処遇の改善について、管理職はこれまで以上に意識的に取り組む必要がある。 また負担増によるモチベーション低下と若手職員の離職が課題であり、負担を減らすべく多職種（作業療法士の採用など）による新たな保育の展開も視野に入れ再考する必要がある。 一方で『の』が入る『子育ての支援』は保護者の自立を目的とした支援であり、専門職である我々ははそこを目指すべきと考える。